

●『エイミー・ガットマンの教育理論

ー現代アメリカ教育哲学における平等論の変容ー』

著者： 平井 悠介

発行：世織書房 / 2017 年 2 月

価格：本体 3,400 円＋税

判型：A5 判，上製，全 304 頁

ISBN：978-4-902163-92-6



【内容紹介】

ルソー、ペスタロッチ、ヘルバルト、デューイ。彼らの名は、教育学を学ぶ学生にとっては、近代以降の教育思想家としてなじみ深い。しかし、ガットマンと聞いて、どのような人物であるかを頭に思い浮かべることは難しい。それだけ教育学にとって新しい人物であるが、重要な貢献をあげたことは間違いない。

本書は、現代アメリカ合衆国の政治哲学者エイミー・ガットマン（現ペンシルバニア大学学長）が、プリンストン大学に所属していた 1980 年代～2000 年代初頭にかけて積み重ねた研究を分析し、教育理論として価値づけたものである。その目的は二つある。第一に、ガットマンの民主主義的教育理論(democratic education)の形成・展開過程を追いながら、その理論を支える民主主義概念が、参加民主主義(participatory democracy)から熟議民主主義(deliberative democracy)へと展開していることの意味を明らかにすることである。第二に、ガットマンの理論の展開を、1980 年代以降のアメリカにおける市民教育の理論的動向と関連づけて検討し、現代アメリカ教育哲学における平等論の変容の意味を明らかにすることである。

ガットマンを含め、英米圏では 1990 年代に市民教育をめぐる学術的な論争が政治哲学領域で生じた。なぜ教育学ではなく、政治哲学の領域で市民教育への関心が高まり、そのあり方が議論されたのか。この意味を探りたいという初発の研究動機は、社会的平等という視点から市民教育論議を解釈するという方向へと向かっていき、教育哲学と政治哲学を架橋する本書へとつながっていった。

ガットマンの思想対象は多岐にわたっている。教育というパターンリズムを正当化する根拠は何か、親と国家の教育権限の対立をどのように考えていけばよいか、有限な教育財を公正に分配するというのはどういうことか、市民教育の教育内容には何が含まれるのか、熟議民主主義という新しい民主主義が現在求められている理由は何か、などがその一例となる。これらの問いをめぐって展開した議論は抽象的なものであり、体系的に理解するのも一筋縄にはいかない。しかし、私たちが生きる現代社会や教育をよりよいものにしていくためには考えなければならないことであるのは確かである。こうした問題意識を有する方にぜひ本書を手にとっていただきたい。

【出版社の書籍紹介ページ】

<http://seorishobo.com/刊行書籍/2017-2/エイミーガットマンの教育理論/>

【著者紹介】

平井悠介（ひらい・ゆうすけ）。筑波大学人間系。

専門は教育哲学。博士（教育学）。主な著書・論文に『教育システムと社会』（広田照幸・宮寺晃夫編著、分担著、世織書房、2014 年）、「近代型学校教育システムの揺らぎと教育の公共性の行方」（『教育学研究』第 85 巻第 2 号、2018 年）などがある。